とのように書いている『前提』がわからない（またはわかりたくない）のに話を合わせてわかろうとして（わかったことにして）しまったら、そこで、質問者がうっかり書いてしまった《それ》は確定してしまう。そういうことになってしまう。確定してしまえばもう、その先のやりとりは《それ》の枠の中から出られない。小さな穴があくこともなければ、あさっての方向にぴょこっ、とホップすることもなくなる。

相手の前提に乗っかってあげるのは一見やさしいことのようにも見えるし、乗っかったほうがおもしろい場面だってあるけど、実は相手を狭いところに閉じ込めてしまうことだ。山下さんはここではそれをしない。だから質問文を読んだ山下さんが書くものはすべて、「なにを聞かれているのかわからないのですが、」から始まっている。活字にはなってないから目に見えないけど、必ずこの前置きがついている。この質問コーナーがすばらしいのはそこだ。なんて親切なふるまいだろう。なんの疑いもなく「これってこうだと思うのですが、」と書いた人も、山下さんがその前提に乗らずにいてくれることで、あれっ？ となる。自分にはこう見えている《これ》が、全然そうは見えていないらしい人の気配に触れているだけで、ガチガチにかたまっていた場に小さな穴があいて、たとえ質問者自身が気づいてなくても確実に息がしやすくなっている。

山下さんはこの質問コーナーでそういうことをやっている。そういうことをやってやろうと思ってやってるんじゃなくて、たぶんそういうことになってしまうんだろう。わたしはそこに毎回ぐっときていたし、本になったものを読んでいてもやっぱりぐっとくる。わたしがこの本のタイトルを決める役を任されたら迷わず『なにを聞かれているのかわからないのですが、』にするだろうけど、たぶんそれだと売れない。

誰かとやりとりするときに、相手の言ったこと書いたことの中から使いたい単語だけを拾ってふくらませて自分のしたい話だけをする人、というのがいる。誰にでもそういうところはあるのかもしれないけど、極端にそういうことばかりする人というのはいる。万が一、そういう人のふるまいとこの本での山下さんの「回答」の区別がつかない人が目の前にあらわれたときは、わたしはきっ